

メイクル新聞

2026年冬号

編集・発行

社会福祉法人メイクルタウン
〒633-0065
奈良県桜井市吉備六三八ノ五
TEL 0744-046015
FAX 0744-046015
メール info-mt@m5.kcn.ne.jp



12月20日、土曜日。
毎年恒例のクリスマス会を開きました。

体調不良で来られなくなった職員がいたため、利用者12名、ボランティア9名に対し、職員3名（司会進行1名、調理2名）という、スタッフにとっては超過酷なスタイルでの開催になりましたが、利用者、ボランティアのみならず、ゆったりと会を楽しんでくださったので、お料理やケーキを必死で準備しながらも、みなさんの笑い声を心地よく聞くことができました。

今回は、初めて参加する利用者さん、ボランティアさんがいたので、最初に参加者全員が自己紹介をすることにしました。ふだん、たくさんさんの前で話す機会がない利用者さんが多いので、どうなるかなと思っていました。自分名前と、お題である「最近のきごと」をとて上手に話してくださいました。どんなできごとをチョイスするか、どんな話し方をするかで、それぞれの個性がよく出ていました。

自己紹介の他は、いつもと同じように、チキンを食

べて、クリスマスソングを歌い、1年の振り返りクイズをして、ケーキを食べ・・・と、ワンパターンと言われそうなのですが、毎年楽しいのが不思議です。

最後もやっぱりお決まりのビンゴ大会でしたが、いつもは全然そろわない人が一番にビンゴしたり、いつまでたってもカードに穴が開かず、ふてくされて寝てしまふ人がいたり、なんだかんだで大盛り上がりでした。

2025年は、いろいろなことがあり、利用者さんも職員も、それぞれの課題に直面し、対応しながら、何とか年末を迎えることができました。いろいろあっても、最後はみんな、笑って終わることができ、嬉しく思います。

2026年は穏やかな1年であってほしいと願っています。それでも何か起こることがあるでしょう。その時もまた、みんなで知恵を出し合い、助け合って解決することができたらと思っています。



連載企画 役員のつぶやき（第四回）

障害者の問題は社会の問題である

松田 量善

○障害は個性である

2000年の頃、教育の場で、障害は個性の一つだと考える先生方が多かった。桜井市内の先生と障害児教育について話し合っていると、そのように語る場面にも出会い、何か割り切れない違和感を覚えた。みんなとは少し違うかも知れないけれど、その違いも大切な一部分だとして「ともに生きる」という観点から、ともすればマイナスイメージで語られることの多い障害をプラス思考で考えよう。障害を否定的に捉えるのではなく、個人の特性として肯定的に受け止めようとする意図についてはそうであるが……。

その時、違和感を覚えたのは、障害を個性ととらえると、支援が必要な場合でも、曖昧にされてしまはいかないかという危惧であった。

最近知ったことだが、この考え方が広まった背景には、1995年の「理想の福祉社会としての共生社会」を目指した『平成7年版障害者白書』と1999年にベストセラーとなった乙武氏による『五体不満足』がメディアで取り上げられたことにあるようだ。その中にはっきりと障害は個性ではあるといい切っていないが、「障害は個性である」という表現が見受けられ、この言説がマスメディアに広く流布

されるようになった。また、障害者スポーツの有名なアスリートたちの活躍が報じられていた。

あれから四半世紀が経って、特別支援教育が進められているが、教育の場においてどのように論議されているのだろうか。このような障害個性論は戦後まもなくからある障害者観である。

○障害者の問題は社会の問題である

障害者の自立と制度という視点から考えた場合、今日では「障害者の問題は社会の問題である」と捉えられている。

障害者に関する制度について考えるとき一般制度と特別制度に大別することができる。

一般制度は障害者と非障害者の両方を対象とする制度で、特別制度は障害者のみを対象とする制度である。教育・就労・居住、公共施設・交通・防災・スポーツ・司法手続きなど各一般制度はすべての人を対象とする制度である。にもかかわらず、歴史的に一般制度から障害者をほぼ排除してきたため、一般制度はほぼ非障害者を対象とする制度となってきた。一般制度を非障害者だけの制度ではなく、障害者をも包摂する制度にすることが、障害者権利条約を2014年に批准した今日の社会に以前にも増して求められている。